



今月の内容

巻頭言「阪神・淡路大震災 20 年を控えて」

特集：フィリピン台風災害支援決定

新しいプロジェクト展開：アフガニスタン

災害救援プロジェクト近況：

メキシコ／四川省／ハイチ／青海省

TOPICS：プロジェクト以外の活動

寄稿：「3 回目の 3.11 を迎えて」

イベント案内

会員・寄付者紹介

会員募集・寄付のお願い

役員・スタッフ活動記録

CODE

Letter

2014. 4. 25 Vol.49

(特活)CODE 海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL: 078-578-7744, FAX: 078-574-0702
Email: info@code-jp.org
URL: <http://www.code-jp.org/>
郵便振替: 00930-0-330579

阪神・淡路大震災 20 年を控えて

「あの日」から、もうすぐ 20 年を迎えようとしています。神戸では地震はないと聞かされていましたが、1995 年 1 月 17 日、あの日の朝の激震は今も昨日のように思い出すことができます。地の奥底から揺すられ、何かが壊れ軋む激しい音も、まだ身体に沁み付いているようです。私の所属する神戸 YMCA は被災地であって、自らも被災しながら、早くから様々な救援活動を展開しました。私自身も三宮の救援本部にいて、物資の調達や配布指示、ボランティアの受付、作業指示などの役割を担っていました。

3 日目にワゴン車に乗って、今は亡き草地賢一さんが神戸 YMCA を訪ねてこられました。一緒に救援活動をやろうと「阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議」が設立され、訳も分からない内に「水野君は事務局次長や！」と役割が与えられました。その後は、YMCA は独自の活動に特化していきましたが、草地さんらの活動とも連携しながら未曾有の災害に共に立ち向かっていったことを振り返ることができます。

あれから 20 年、国内外に多くの甚大な災害が起きました。大地震や大洪水、巨大台風に大津波など、海外だけでなく、日本においても中越地震や東日本大震災など今なお大きな傷跡が残る大災害が突然として人々を襲い、多くの生命を奪い、

住居や職場を破壊していきました。草地さんが残された仕事を受け継ぐ形で誕生した CODE は、その「ポスト阪神淡路」の時代に起こった 50 を超える大災害に対して、市民の善意を救援の形で支援し続けたことになります。あの時に問われたボランティアの意味。つながりやネットワークの大切さ。「言われなくてもする。言われてもしない。」という人間中心の行動選択基準など、これらは CODE の行動指針となったことでしょう。

草地さんは阪神・淡路大震災後の講演の中で、このように語っています。「私は神戸の地で、ボランティア活動を通して地域や社会を復興させていると思っています。ただし、その時に神戸だけが良くなったらいい、ということではなく、人類の利益と、地球の利益を実現するために働いていくつもりです。つまり、地球市民社会の一員として、地球市民になり得る努力をしながら」と。

草地さんの思いを受け継ぎながら、CODE は支え合う大切さや一人ひとりの尊さを基盤に置いて、これからも被災された世界の多くの人々と共に市民の連帯を呼びかけていければ、と願っています。

水野雄二
(CODE 副代表・神戸 YMCA 総主事)

特集

フィリピン漁業支援プロジェクト

セブ島北部、バンタヤン島の漁村にて

2013年11月8日、巨大な台風 Haiyan（日本名：30号、フィリピン名：Yolanda）がフィリピン中部を襲いました。CODEは11日より救援活動を開始し、これまでに3回の現地派遣を行いました。フィリピンの現在の状況、救援プロジェクトについてお伝えします。

台風 Haiyan について

観測史上最も強い台風 Haiyan は最大瞬間風速 105m/秒の猛烈な風と気圧の低下によって発生した高潮によりサマル島、レイテ島、セブ島、パナイ島などの島々に非常に大きな被害をもたらしました。フィリピン国家災害リスク削減委員会によると、3月14日時点で死者6,268名、負傷者28,689名、行方不明者1,061名、全壊家屋550,928棟、損壊家屋589,404棟、被災者数約1,608万人という未曾有の被害が発生しています。

家屋の被害と移転問題

現在、多くの建物は応急修理が行われましたが、屋根が吹き飛ばされ、柱は折れ、傾いた家に住み続ける被災者もいます。家の再建には多額の建設費が必要となり、元々、日々の生活を送る分の収入しか得ていない人たちにとっては今回の台風被害からの復興は決して易しいものではありません。

またフィリピン政府が被災地の海岸から40mの区域の住居の建設を禁止したことで他の地域への移転問題が起こっています。土地をリゾート開発のために資産家に購入されるケースもあり、土地の所有権を持っていない住民にとって大きな問題となっています。



倒壊した家屋（バンタヤン島にて）

農漁業の被害



台風で壊れたボート

台風被害で大きくダメージを受けているのが農業と漁業です。農業においてはココナッツやマンゴー、バナナなどの木が強風で倒れ、それらが再び成木となり果実を収穫できるようになるには10年近い期間を必要とします。また漁業においても、強風や高潮により多くの漁民がボートを失いました。壊れたボートのローン返済をしなければならない漁民もおり、高額なボートを再購入することは難しい状況です。台風被害の大きい沿岸部には貧困層の人たちが多く住んでおり、彼らは農作物やボートなどの収入源を失ったことで生活再建の目処を立てることができません。

漁業支援プロジェクト

CODE は災害救援プロジェクトとしてセブ島北部、バンタヤン島の被災者への漁業支援を行うことを決定しました。仕事道具であるボートを失った漁民にボートを提供することで、生計と生きがいを取り戻してもらいます。

プロジェクトでは、日本の皆さまからお預かりした寄付を使って、現地 NGO ネットワーク ABAG! Central Visayas(※下記記載)を通じて、被災地にボートを提供します。プロジェクトの対象地となるセブ島北部、バンタヤン島の6つのバランガイ(最小行政区)には Association と呼ばれる住民グループが組織されており、住民と協議してボートの分配や管理を行います。

ボートは3人で1艇を共有することで、個人の利益を超えた支えあい(バヤニハン)を促進します。

また、住民参加を大切にしている ABAG のワークショップを通じて、漁業コミュニティを陰で支える女性の役割にも注目します。

セブ島、バンタヤン島の漁業

セブ島北部、バンタヤン島沿岸部には多くの漁民は、日中は自給のための農業を行い、漁は早朝と夕方に行われており、獲れた魚の多くは仲買人を通じて市場で売られるほか、小魚や干物に加工して売り歩くことで収入となります。

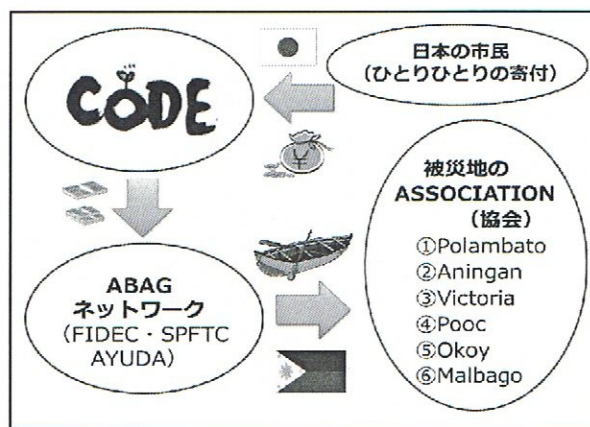
また場所によっては沿岸から数キロの海にはサンクチュアリという魚の保護区が設定されており、漁が禁止されています。サンクチュアリの外で漁を行うためモーターボートを使う住民が主流になっています。

フィリピン漁村の女性たち

女性が漁具の管理や修理、出漁、販売を行うことで漁業は支えられています。フィリピンでは妻、母としての役割の他に男性の陰で家計を支えているように、女性に過度な負担が強いられています。そんな背景から、フィリピンには NGO や Association に参加し、社会を変えていこうと奮闘する女性が多くいます。

漁業支援プロジェクトの今後

現在、ABAG とプロジェクトの調整を重ねており、間もなく6つのバランガイへボートが提供されます。しかしボートの数は十分ではなく、今後もさらにボートの提供を行う必要があります。また、このプロジェクトの中で、そして同じ被災地である東北とフィリピンの漁民どうしの交流を行うことができればと考えております。引き続き皆さまのご協力よろしくお願い致します。



今回のプロジェクトの枠組み



運営の仕組み

※ ABAG! Central Visayas について

ABAG! Central Visayas とはセブを中心に様々な分野で活動する11の NGO が災害時に連携するネットワークで、うち8つの NGO の代表を女性が務めています。漁業支援プロジェクトではフェアトレードや農業を中心に活動する SPFTC と漁業支援を行う FIDEC をメインのカウンターパートとしています。

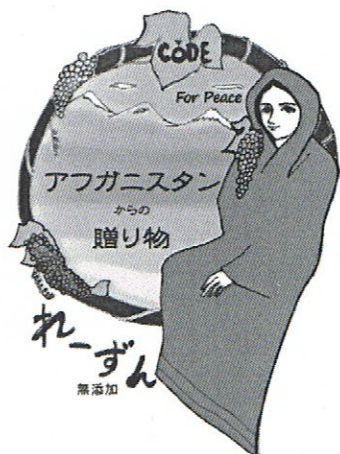
「アフガニスタンからの贈り物」

無添加のれーずんが、アフガニスタン ミール・バチャ・コットから届きました

みなさまからの長年のご支援のおかげで、この度レーズンを輸入・販売する運びとなりました。

新しい展開

アフガニスタンのぶどうプロジェクトでは、今新しい展開を迎えています。先日アフガニスタン、カブール州北部のミール・バチャ・コットのぶどう農家よりレーズン 20kg を無事試験的に輸入することができました。加えて、40kg を新たに送っていただくよう、現地をお願いをしたところでもあります。このレーズンを『アフガニスタンからの贈り物 無添加 れーずん』としてみなさまのもとへお届けしたいと思います。



ボランティアの岸本くるみさんがデザイン

「商品」ではなく「メッセージ」!

私たち CODE が 2003 年より 10 年以上行っているこのプロジェクトの柱は、20 数年間の戦禍の中で過酷な生活を強いられているアフガニスタンの暮らしを、一人でも多くの方に知ってもらうこと、また彼らがよりよい生活を確保するため、自立の一手をお手伝いすることです。つまり『アフガニスタンからの贈り物 無添加 れーずん』は単なる「商品」のというよりはむしろ、「メッセージ」という意をもってしています。レーズンを食することで運動の一部に自分が参加する、アフガニスタンの自立をお手伝いするという意思表示をしていると思って、みなさまにご参加いただければ幸いです。

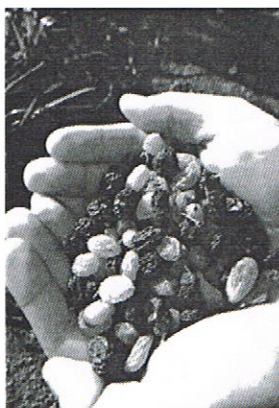
今やぶどう農家は 537 世帯 (2013 年 6 月時点) にのぼり、収穫量が年々増えています。化学肥料を使用していたときは、収穫量は爆発的に増えるが長期間ぶどうが育たないと農家の方は言っておられました。今、無農薬栽培を行っているぶどう農家では、一本の木から 5 ～ 10kg のぶどうを収穫することができるということです。

「れーずんの会」

先日「れーずんの会～れーずんを食べて国際協力を考えよう」という会を開きました (様子は <http://code-jp.org/blog/afghanistan/> にて)。約 18 名 (スタッフ含む)、学生から社会人さまざまな方がおいでくださり、レーズンを食べながら充実した会になりました。会では特に販売に関するアドバイスやご指導をいただき、「作り手の顔が見える方がいい」や、「生産工程を記すとわかりやすい」など具体的な意見を聞く機会にめぐまれました。また試験販売用パッケージが、「日本フェアトレード委員会 (熊本市)」や岸本くるみさん (CODE 元ボランティア) のご協力の下無事にできあがり、つながりのある団体様を中心に試食をいただいている段階です。

生のレーズンを食べてほしい

しかし、現地カウンターパートであり、今まで 10 年以上我々と一緒に活動を続けてきてくださっているラフマンさんらは、「アフガニスタンのぶどうは生で食べるのが一番なんだ」と言います。有数のぶどう原産国であるアフガニスタンのぶどうを、多くの方に生で食べてほしい、というこの気持ちを実現できるよう願っております。『アフガニスタンからの贈り物 無添加 れーずん』はもうすぐみなさまにご報告できる段階にきております。楽しみにお待ち下さいませ。



販売は 5 月中旬を予定しております。

お求めの際は、電話、FAX、メール、はがきで承っております。お気軽にお問い合わせくださいませ。

CODE 事務局

TEL: 078-578-7744

FAX: 078-574-0702

Projects

災害救援プロジェクト近況報告



メキシコ／四川省／ハイチ／青海省

メキシコ暴風雨 (2013.9.15～)

昨年9月、ハリケーン“イングリッド”と熱帯低気圧“マヌエル”が同時にメキシコ南部を襲い、大規模な豪雨災害を引き起こしました。特に山間部では地滑りにより孤立する集落が多く発生し、また政府を始めとする支援が少なかったため、飢餓状態に陥る集落もありました。

メキシコ在住のCODE海外研究員クワテモックさんは、現地の若者団体“Guerrero por la Montana”とともにゲレーロ州山間部で食糧、冬物衣類の配布を行っています。また現在、クワテモックさんは被災者へのワークショップや子どもへの寄り添い支援を計画しています。CODEは今後もこの活動へのサポートを行っていきます。(上野智彦)



近隣の人々を集め、ワークショップを行うクワテモックさん

四川省大地震 (2008.5.13～)



みんなの憩いの場、伝統建築の老年活動センター

「光明村老年活動センターを使った農家楽」

2008年5月12日に発生した四川大地震からまもなく6年目を迎えようとしています。

現在、四川省の被災地に行っても震災の面影を残すものはあまり多くはありませんが、5月12日だけは北川県の地震記念遺構への道は多くの参拝客の車で渋滞になります。

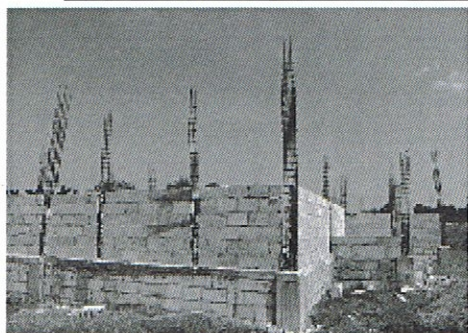
CODEが震災直後から支援してきた北川県光明村では、現在も多くの若者が仕事を求めて外省へと出稼ぎに出っていますが、村に残る高齢者はCODEの寄付金で建設された「老年活動センター」で日向ぼっこしながらお茶を飲み、マージャンやトランプをして余暇を楽しんでいるそうです。

センターの運営も少しずつではありますが、軌道に乗って来ているようです。村唯一の医師、彭さん

によると、センターの前に作られた蓮の池には毎日20人くらいの観光客がやって来て釣りに興じているそうです。釣り上げた魚は、センターのレストランで料理して食べたり、持ち帰るなどそれぞれの楽しみ方をしています。老年活動センターは、村の高齢者に対してはすべて無料で開放し、外部からくる観光客からは料金を頂いて運営しています。

四川では、被災地の人々が外部の支援を最大限に活用して、地域の自立に向けて歩み出しています。CODEは、引き続き光明村の今後を見守っていきたいと思います。(吉椿雅道)

ハイチ地震 (2013.1.13～)



学校らしくなってきた建物

2013年9月頃から建設が一時停止になっていた、農業技術学校 (ÉTAL) の建設が再開されることになりました。2014年3月中旬から4月上旬にかけて、ÉTALの顧問会の一員である、シルビオさんがハイチに滞在されました。その目的は、難航していたÉTALの土地契約や学校の登録などを行い、建設を再開させることでした。西半球の最貧国と言われているハイチでは、このような新しい登録を行うことが非常に難しいのです。

しかし、無事この学校を立ち上げようとしていたGEDDH(農業や植林活動を行っているNGO)のメンバーと、機械、木工などの技術学校(CCFPL)の校長先生であるブローさん、クリスト・ロア宣教修道女会のシスターの須藤昭子さんの連携のおかげで、建設

再開の目処がつけました。シルビオさんは、「建設は2014年5月末くらいで終わり、学校の先生や生徒、道具などの調整を2014年9月までにできれば」とおっしゃっています。形として見えてきたÉTAL、早く農業技術を学ぶ生徒たちの姿を見たいと願うばかりです。引き続き運営などのご協力をいただきますようお願い申し上げます。(多田茉莉絵)

青海省地震 (2010.5.14～)

2010年4月14日に中国・青海省で発生した地震(玉樹地震)では、標高3700mのチベット高原を襲い、中心の町だけでなく周辺の草原に暮らす遊牧民たちも大きな被害を受けました。CODEはこれまで現地のNGOと共に支援活動を行ってきましたが、最終的にインドネシア人アーティストのイアニさんと共に称多県拉布(ラブ)郷での「ヤク銀行プロジェクト」を決定しました。チベット人にとって不可欠な家畜、ヤクを被災者に提供し、飼育・繁殖する事で自らの生活を再建してもらいます。その後、ミルクやバター、現金などで少し返済してもらい、その資金で次の被災者を支えるという仕組みで実施しています。地元の僧侶、獣医、住民、遊牧民などで「ヤク銀行委員会」を組織し、具体的な提供先、返済方法、飼育などが協議され、昨年8月に遊牧民の中でも特に貧しい人たちにヤクが提供されました。厳寒な天候や病気などによって亡くなる子ヤクも出てきていますがおおむね元気に育ってきているようです。今後、ヤクの成長状況などもお伝えしていきます。(吉椿雅道)



遊牧民に提供された子ヤクたち

寄稿

3回目の3.11を迎えて

被災地 NGO 協働センター 頼政良太

命日の前日のことをお逮夜(おたいや・おだいや)と呼び、故人をしのいでお祈りを捧げるそうです。そのお逮夜にあたる3月10日には釜石市の復興住宅にお住まいのご夫婦からお願いがあり、ささやかな「祈りの場」を作るお手伝いをさせていただきました。竹筒の中にろうそくを灯して並べ、雪がちらつく中、住民の方のオカリナの音色が静かに響きながらそれぞれが祈りをささげる場となりました。

最初のご夫婦2人だけでしたが、通りすがりの人もポツリポツリと集まり、それぞれの形で祈りを捧げ、それぞれの想いを語っていました。ある

女性は「息子が流された」というお話をさらっとされ、ある方は「市の追悼イベントもあるけども自分たちの形で祈りを捧げたい」とおっしゃられていました。

きっと、地震や津波への向き合い方は人それぞれの形があり、祈りの捧げ方も人それぞれなんだと思います。決して大きな形ではありませんでしたが、集まった方の想いをそれぞれの形で表現できた場になりました。

こうした場に立ち会えて、改めて一人ひとりの想いを大切にしたいと思いました。少しずつ、違う形でもみんなの想いがつながっていくには、こうした場が様々な場所で、たくさんあったらいいんだろうと思います。

ボランティアにできることは少ないですが、こうしてただそばにいて次の一歩踏み出すお手伝いはできるんだなあと、改めて感じた夜でした。

TOPICS こんなこともやっています！

インドネシアの若者たちと CODE



2月27日、CODE事務所にインドネシア人の若者6名と早稲田大学の学生2名が訪問してくれました。CODEの成り立ちや理

念、活動、今後の課題などをインドネシアの若者たちに話させていただきました。神戸大学国際協力研究科に留学しているインドネシア人のMさんのご縁でこの交流が実現しました。このグループはBDSG (Bandung Disaster Study Group) という名前で、ジャワ島西部のバンドンを拠点に防災や

災害について学び、ボランティアを行う若者のグループです。BDSGは、2010年バンドン工科大学(ITB)の学生たちの中から生まれ、これまでに様々なグループ、地域で若者に注目して防災教育を指導しているそうです。

CODEが、2006年のジャワ中部地震の支援の中で学んだゴトンロヨン(相互扶助の精神)やKKN(大学が行う地域での課外授業)、被災地の耐震普及などの事例を話すと誇らしげな顔をしていました。またCODEの大切にしている理念「最後のひとりまで」や「支え合い」、「学び合い」などにも共感してくれました。今後、インドネシアで災害が起これば彼らが率先してボランティアに向かうでしょう。その時はCODEの良き仲間として連携してくれることと思います。CODEは今後も、国を超えた顔の見えるつながりを大切にしていきたいと思っています。(吉椿雅道)

2015年防災世界会議日本CSOネットワーク(JCC2015)

今年1月10日、「ポスト兵庫行動枠組(HFA2)」に向けて、提言などに参画し、枠組に市民の声を反映させるため、「2015 防災世界会議日本CSOネットワーク(JCC2015)」(3月24日時点で80団体が賛同)が設立されました。

来年2015年3月14日から18日まで、仙台市で第3回国連防災世界会議が開催されます。これまで1994年に横浜で第1回、2005年に神戸で第2回が開催され、第2回の際には2005年から2015年までの国際的な防災の取り組み指針である「兵庫行動枠組(HFA)」が策定されました。そして第3回ではポスト兵庫行動枠組(HFA2)の策定が行われる予定となっています。

第2回でHFAが策定された際、今回のように国内の市民団体でネットワークを立ち上げる動きはなく、結果として、HFA策定に十分に市民が参加することはありませんでした。CODEもJCC2015に参加しており、来年3月に迫るHFA2策定へ向けた提言づくりに関わっていきます。

兵庫行動枠組 5つの優先行動	昨年の段階でのJCC2015の提言内容
①防災を政府の優先課題に位置づけること。 ②災害リスクを特定・評価・観測し、早期警報を向上。 ③防災文化の構築のため、知識・技術・教育を活用。 ④潜在的なリスク要因を軽減。 ⑤災害救援のための事前準備の強化。	①人命、生活、資産等への「日常的」災害による影響を考慮する。 ②最もリスクにさらされている、最も貧しく、社会の中で周縁化された人々を優先する。 ③災害に対する脆弱性の要因となっている根本的原因に取り組む。 ④権利と責任、および説明責任を軸に政治的コミットメントを確保する。 ⑤パートナーシップおよび市民の参加を促す。(JCC2015 総会より)

ともにCODEを創りませんか

A4サイズの裏紙の寄付もお願い致します！

■入会のお誘い

私たちと共にCODEの活動を担っていく会員を募集しています。

【賛助会員】

個人・学生：年会費2,000円×1口以上

NPO/NGO：年会費2,000円×1口以上

企業・団体：年会費10,000円×1口以上

ほか、正会員、登録会員ご希望の場合は事務所まで

■ご寄付のお願い

CODEの活動を継続するために皆様からのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は

15%を上限としてCODEの管理運営費に使わせて頂いております。ご協力お願い致します。

郵便振替 加入者名：CODE

口座番号：00930-0-330579

銀行振込 ゆうちょ銀行

支店名：〇九九店(ゼロキュウキュウ)

支店番号：099 預金種類：当座

口座番号：0330579

加入者名：CODE

事務所での作業や翻訳ボランティア、自宅でも作業可能なボランティアなども募集中です。

イベントのお誘い

「CODE のタベ」

年に一度、会員や寄付者の皆さまに集まっていただき、CODE が現在進めている救援プロジェクトを報告させていただきます。食事を交えながらの楽しい交流の場になればと考えております。準備の都合上、事前のご予約が必要です。参加をご希望の方はお電話、メール、FAX で CODE 事務局までご連絡下さい。

◆日時： 6月14日(土)18:30～21:00

◆場所： 兵庫県民会館 7 階会議室「亀」
(神戸市中央区下山手通 4 丁目 16-3)

「CODE 寺子屋」

～阪神・淡路大震災から 20 年を前にして 今、若者に伝えたい～

阪神・淡路大震災を機に立ちあがった CODE の活動は、もうすぐ 20 年を迎えます。災害後、先遣隊を派遣し、その現場からの報告を聴き、また自分の目で被災地を見た CODE 事務局長(当時)は、そこで何を感じ、何を考え、何を大事に支援を行ってきたのか、19 年間の支援活動の根底に流れる思想や哲学を語ってもらいます。

◆日時： 第 1 回 4 月 19 日(土) 10:00～12:00(終了)

第 2 回 5 月 10 日(土) 14:00～16:00

第 3 回 6 月 21 日(土) 14:00～16:00

◆場所： CODE 事務局(「新開地駅」より徒歩 5 分)

◆講師： 村井雅清(CODE 海外災害援助市民センター理事)

◆参加費：無料

◆お申込：当日参加も可能ですが、出来る限り事前に CODE 事務局にお申込みください

役員・スタッフ活動記録 2013/2/1～2014/4/19

- 2月17日 NGO-JICA 協議会 NGO 側コーディネーター戦略会議に参加(村井理事)
CODE 理事会
2月27日 インドネシア若者グループ“BDSC”にレクチャー(吉椿、岡本、多田)
2月28日 コープこうべフィリピン寄付贈呈式(吉椿)
SVA と全日本仏教婦人連盟にアフガン・レーズン販売への協力依頼(村井理事)
3月3日～7日 フィリピン台風被災地第 3 次調査(吉椿、静岡県ボランティア協会)
3月3日 NGO-JICA 協議会 JICA 側とのコーディネーター会議に参加(村井理事)
3月11日 みなとコンサルティングにフィリピン支援報告(岡本、上野)
都市生活コミュニティセンターにアフガン・レーズン販売への協力依頼(村井理事、多田)
3月17日 NGO-JICA 協議会に参加(村井理事)
3月21日 ひとぼうユース・ミーティング 2014 に参加(上野)
3月25日 バロントラベルでフィリピン修学旅行事前学習会の打合せ(吉椿)
3月28日 ワールドユースジャパン北米高校生研修打合せ(吉椿、頼政、多田)
第 1 回れーずんの会、(レーズンを食べて国際協力)開催
3月29日 フィリピン報告会(室崎副代表、山添理事、村井理事、村上理事、吉椿、上野)
4月4日 JIPPO、同志社大 Ahmad さんにアフガン・レーズン紹介
4月10日 神戸学院大学現代社会学部で講義「ガイダンス」(村井理事)
4月17日 神戸学院大学現代社会学部で講義「阪神淡路大震災とボランティア」(江田先生、村井理事)
4月18日 CODE 理事会
4月19日 CODE 若者寺子屋第 1 回(村井理事)

会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略) 2014/1/9～4/18

一般寄付

吉田 篤/拓殖大学北海道短期大学かたつむり部/田中 照康/高橋 潤子/桂 光子/柚原 里香/米田 玲子/塚本 謙三/紅谷 昇平/折口 富美子/鶴飼 愛子/田中 照康/スズキタツロウ/山田 千恵子/ナンバ ミドリ/水嶋 勉/田中/木馬の会

正会員

芹田健太郎

賛助会員

吉田 篤/浅野 壽夫/高嶋 芳子/前畑 美智子/アントニオ マルゴット/原 ちえこ/中道 修/紅谷 昇平/鶴飼 愛子/水野 浩重/阿部 好一/半田 裕子/中村 安秀/遠周 龍子/山本 あい子/山本 治子/北 茂紀/山崎 清治

編集後記

2014 年 4 月 1 日 20:46(チリ現地時間)に、南米チリ沖でマグニチュード 8.2 の大きな地震が発生しました。発生後まもなく私たちは、昨年 12 月に高知県との交流事業でお招きしたイザベルさん(ICA チリ代表理事)や CODE 現地研究員のクワテモックさんらと連絡を取り、地震の情報を得てきました。被災された方々におかれましては、心よりお見舞いを申し上げますとともに、CODE として情報発信以外に今できることを一同模索している次第です。(新スタッフ 多田茉莉絵)